

月産700万個の金属プレス部品を生産する自動車部品メーカー。板金プレスを中心に試作から金型製作、量産までの社内一貫生産を強みとする。高品質で付加価値の高い製品加工を目指し、設備投資にも意欲的だ。

株式会社汐見製作所

大手自動車メーカーのティア1

(株)汐見製作所は、試作から金型・治具の設計・製作、量産加工まで社内で一貫してこなす自動車部品メーカーだ。見山行雄氏(現同社会長)が1965年にプレス加工を主体とする個人会社を発足。その後、金型製作も始め1968年に法人化した。以来、大手自動車メーカーのティア1として、二輪・四輪車の車体・電装・

エンジン・足回りなどに使われる小物のブラケット類を生産。現在も同メーカーからの売上が65%を占める。

毎月の生産数量は約700万個。品番点数は5000アイテムにおよび、常時、1500アイテムが流れている。ティア1の中でも、これほど多くのアイテム数を生産しているところは他にはないという。自動車関連以外では船外機の部品、また、量産部品以外では自動化設備や精

密板金部品、工作機械用のカバー、住宅用壁パネルの製作なども行っている。

大学入学時に叔父から声がかかる

見山圭二社長は入社17年目の2018年4月に叔父である創業者から事業承継した。会社には跡継ぎがおらず、圭二氏は大学に入学するとき、創業者から「卒業したら、汐見に入らないか」と勧められたという。

「正直、声掛けされたときはすごく嬉しかったです。会長のお家はとても裕福そうで、自分もあんな暮らしができるのかと胸を躍らせたものです。もちろん2001年に入社したとたん、そんな甘い考えはどこかに吹っ飛びましたけど」と見山圭二社長は笑う。ただし、「会社の基盤を築いた会長には、片時でも感謝の気持ちを忘れたことはない」という。



▲ダイレクトサーボプレスDSF-N1-A 150トン



▲ NC1-110トンライン



▲ NC1-80トンロボットライン

ピンチをチャンスに

ブラケットなどの小物プレス部品を中心に順調に受注を拡大していた同社の経営が突然、危機に見舞われたのは2008年のリーマンショックである。同年の9月期決算では35億円の売上があったが、得意先からの発注に急ブレーキがかかり、翌2009年には26億円まで一気に落ち込み営業赤字に転落した。「木金まで休まざるを得ず、社内の雰囲気も悪くなっていました。それを肌で感じて、『うちの会社はこのままではいけない』と痛感しました」（見山社長）。追い打ちをかけるように2011年には東日本大震災が起り、売上は23億円にまで低下。2016年まで売上は横ばいで、利益もほとんど出ない状態が続いた。

2017年にようやく売上は31億円まで回復し、前期は36億円、今期は39億円まで見通せるところまできた。しかし、売上高の回復も去ることながら、見山社長が注意を払っているのが営業利益率のほうである。実は2008年頃の同社は外注費を含む変動費（売上原価）が60%も占めていた。そこで、リーマンショックを機に社員みんなで一致団結し内製を強化、外注費の抑制や経費の削減など損益構造の改革に努めたのだ。効果が現れるまで数年を要したが、今では財務体質は大幅に改善され、適正な収益も追求できるようになった。

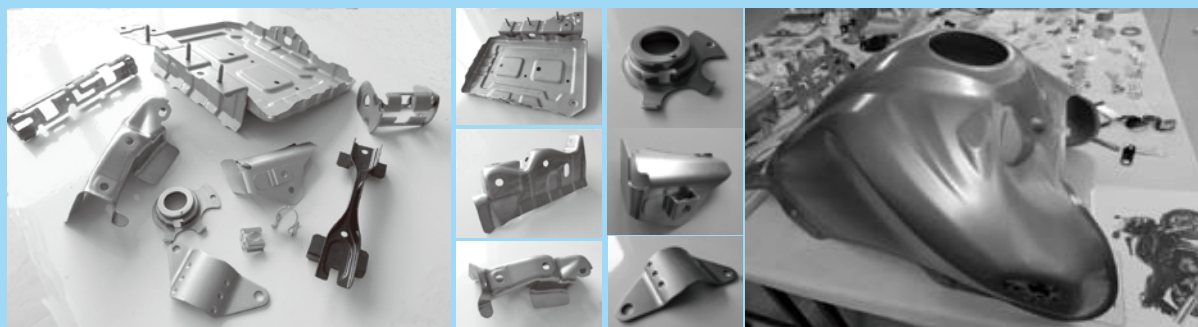
「あの時、考えを改めなかったら、おそらくは売上が回復しても、さしたる利益も出せない体質のままだったと思います。リーマンショックは、われわれにとって貴重で有難い経験になったのです」（見山社長）。

10台のAIDA製プレス機が稼働

主力生産設備は板金用のプレス機である。このうちAIDA製のプレス機は全部で10台。内訳は150トンプレス1台、110トンプレス4台、80トンプレス4台のロボットライン、そして2018年に導入したダイレクトサーボプレス「DSF-N1-A 150トン」だ。4台のロボットラインは4工程の製品専用だが、それ以外は製品ごとにプレス機を専用化しておらず、加工内容に応じてその都度、機械を使い分ける。4台のロボットラインをはじめ、9台は単発プレスで、「DSF-N1-A 150トン」のみが順送プレスだ。

実は、同社では加圧能力300トンまでの機械を60台配備しており、従来、AIDA製のプレス機の数には少なかった。しかも10台中9台までは中古の機械で、AIDA社から直接、購入したのは「DSF-N1-A 150トン」が初めてである。「AIDAさんの機械は、中古機と言ってもきちんと精度が出ますし、故障することもあります。世間の評判も良く、そろそろ新品を購入しても良いのではないかと思います」

製品例：自動車、バイク部品



株式会社汐見製作所



代表取締役社長
見山 圭二氏



プレスグループ課長
川水 星寿氏



▲ 本社・工場前景

<会社のあらまし> <http://siomi.jp/>

株式会社 汐見製作所
代表取締役社長 見山 圭二
本 社 〒431-0302 静岡県湖西市新居町新居2800
TEL 053-594-3204 FAX 053-594-5787
創 業 1965年 資本金 1600万円
設 立 1968年 売上高 43億1000万円(2018年9月期) ※
社員数 207名※ ※グループ全体

AIDA製プレス機を高く評価

期待にたがわず、「DSF-N1-A 150トン」の導入後の評価はきわめて高い。「操作性が良く、動きがスムーズで無理なく加工速度を上げることができます。また、つくりがしっかりしていて、音が静かなことも気に入っています」とプレスグループ課長の川水星寿氏は話す。同社には150トンの順送プレス機が16台あるが、加工速度を比べると、他の15台が70~80spmであるのに対し、唯一、サーボ特有の振り子モーションを備えた「DSF-N1-A 150トン」だけは100spmで動いているという。

また、「DSF-N1-A 150トン」は他の15台とは異なり、レベラフィードもAIDA製のものに統一されている。プレス機本体の操作盤からレベラの設定ができる機能が付いているため(オプション機能)、プレス機とレベラの連携がとりやすい。実際に「レベラフィードと同期させる設定が『DSF-N1-A 150トン』ではすごく簡単にできます。レベラの調整が要らないというのは、現場としてはすごく助かります」(川水氏)。

優良の試作開発会社を傘下に収める

同社は高品質の量産品を顧客に安定供給することに長けている。それはそれで重要なことだが、将来を考えると、尖った技術を持ち、顧客に提案できるような会社にはいかなければならない。実はその布石も打ってある。

具体策の1つとして2016年、M&A(企業買収)により、自動車用金属シート部品の試作開発を手がける服部板金工業(有)(横浜市金沢区)をグループ傘下に収めた。服部板金工業の専門は試作開発だが、1.2Gpa級高張力鋼板やチタン、アルミ合金など難加工材の冷間加工を手がけるなど、プレス、板金、パイプ曲げなど塑性加工の工程開発能力を持ち、「試作だけに終わらず、量産化へ

の道を切り拓いてくれる会社」として顧客の評価はきわめて高い。まさしく尖った技術を持つ会社だ。

「その服部板金工業さんが、買収先を探していることを知り、願ってもいないチャンスだと思いました。会長に相談すると、『君に任せる』と言って下さったので、すぐに手を上げました。ほかにも手を上げた会社は何社かあったようですが、当社に決めてくださって本当に良かったです」(見山社長)。

500トン機の導入を検討

「今は外部環境も良く、それに応えて社員さんたちが頑張ってくれています。その社員さんやお客さまの期待に応えるため、設備投資もしっかり行おうと思っています」と見山社長。既存のプレス機は最大でも加圧能力300トンの機械であり、ワークによっては300トンでは厳しいものも出ている。すでに子会社となった服部板金工業では高張力鋼板の試作などをこなしているが、そこから量産の話が生まれても、同社の既存のプレス機では対応できないのが現状である。また、電気自動車(EV)の普及で想定される部品点数の減少などを見据え、基礎加工技術の強化によって受注を拡大していく必要がある。それには、高い圧力により、高精度の加工ができる設備が必要だ。

これらを総合的に判断し、最有力候補としているのがAIDA製の500トンクラスのプレス機だ。AIDA製のプレス機の性能評価は「DSF-N1-A 150トン」で立証済みでもある。

そこまで決まっているのに、導入を躊躇するのはなぜか。実は本社工場の移転先が決まっていないためである。同社では現在の本社工場が遠州灘から至近距離にあるため、BCP(事業継続計画)対策として、別の場所に移転する計画を持っている。その移転候補地の開発がなかなか進まないのだ。移転が先か、新しいプレス機の導入が先か、何とも言えない状況なのだ。



▲ CAD/CAM設計室



▲ ワイヤークット放電加工機



売上100億円が目標

「売上規模で言えば、かねて当社の会長が『100億を達成したい』と言っていたこともあり、それを実現し恩返ししたいと思っています」と見山社長は言う。そのためには、顧客の数を今よりもっと増やさなければならないが、それには他社が真似できないような難しい仕事をできるようにすることだ。

「プレスは絶対的に加工賃が安いので、他の加工手段から工法転換できるようになれば、お客さまにメリットがあるし、当社も付加価値を高めることができます。そのための技術力をどのようにして身につけるか。結局は人材育成にかかっていると思っています」と見山社長は語っている。社員の力を信じて、小物プレス部品のトップを目指す考えだ。



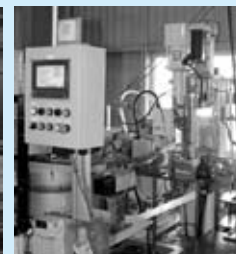
▲ マシニングセンタ



▲ スポット溶接



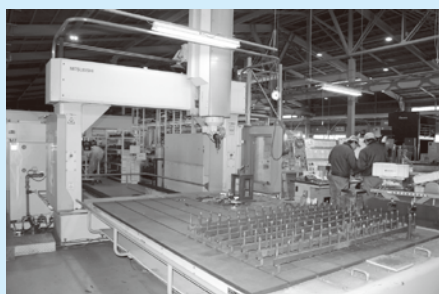
▲ 溶接ロボット



▲ 溶接自動機



▲ 三次元測定器



▲ レーザー加工機



▲ レーザー加工機